

	儀兵衛は、走りました。 いなむらのひとつに、火をつけます。 よくかわいているいなむらは、ぼつと燃え上がりました。 「まづめく」 次から次へ、次の田んぼへ。 儀兵衛は、走って走って…… 「みんな、早く集まってこいよ」 そして、丘へひなんするのだ」 「全部めく」
	「庄屋さまの所が、火事だぞ」 「庄屋さまに、何かあったら大変だ」 「それ、火をけしにいけ」 村人たちが、すぐさま、集まってきました。 こんな時には、村じゅうひとり残らず、火けしに、加わることになっていたのです。 「ぬきながら」 「庄屋さまあ」
	まづ先にやってきた若者たちが、火をけそうとすると、儀兵衛がおしとめました。 「津波だ！ いなむらの火をけすな」 「庄屋さま！ どうですか」 「津波だ。津波がくる」 村のみんなが、集まってきたかどうか、たしかめるのだ。 そして、「本松から、 広八幡神社のほうへ、 みんなをひなんさせるのだ」 「はい、庄屋さま」 「少しずつぬきながら」 こうして村人たちが、高い所にひなんした時、 「あれを見ろ！」 「さつとめく」
	儀兵衛が、海のむこうを指さしました。 「なんだろう」 村人たちは、おそろしいものを見ました。 まさに、暗くなりかけた沖の海に、長く黒い帯が広がり、 こちらに、ぐんぐん近づいてきます。 「どうしようん」 「津波だ！」 「津波がくる」 「ぬきながら」 ぐううおーん



人々は、思わず身ぶるいました。
海沿いの村が、水けむりとともに、津波に
おそわれたのです。
村のすべてのものが、さかまく波に
のみこまれ、すがたを失っていきました。
(少しの間)
つい先ほどまで、津波がくることを
知らずに、あそこにいたのだと、村人たちは
気づきました。
「おう、おそろしいことだ」
時をおいて、津波は二度、三度と、
おそってきました。

一ぬく

津波の威力



村人たちは、ずらりと、儀兵衛の前に
ひざまずいて、頭を下げました。
「おかげさまで、命が助かりました」
「庄屋さま、ありがとうございます」
「儀兵衛は、うなずきながら、いいました。
「浜口の家には、
大地震のあとには、津波がくる
という、いい伝えがあつてな。
とつさに、それを思い出した。
ご先祖さまの、言葉のおかげだ」

一ぬく

村人たちの
感謝の意



儀兵衛は、若者たちを引きつれて、
となり村へいき、たくわえ米を
借りてきました。
そして、おかみさんたちが、米をたき、
にぎり飯をつくりました。
「さあ、これ食べて元気をださない」
儀兵衛が、先頭に立って、みんなに配って
歩きました。

一ぬく

儀兵衛の
気遣い



やがて、余震が続くなか、
あれはてた村に、いくつもの飯小屋が、
つくられました。
村人たちが、立ち直りの一歩を
ふみだしたのです。
ところが、津波によって、何もかも
失ってしまったある村人は、儀兵衛に、
「もう、広村には、住んでいられません。
働き口をさがして、よその村へ
うつろうと思います」
また、ある村人は、
「またいつか、津波がくるかもしれないと
思うと、こわくなりません。
もっと、安全な所へいきます」
と、なみだながら、うつたえました。

一ぬく

悲しいで



儀兵衛は、浜辺にやせる波を見つめていました。
天淵ヶ浜と美しく名づけられたこの浜辺。
「ここに、津波をふせく堤防をつくろう。
村人に働いてもらえば、それが働き口になる。
ふるさとが、よみがえるのだ。」
儀兵衛は、ひとり、うなずきました。
浜口家では、むかしから、親子でしゅうゆをつくり、江戸で大きな商売をしていました。
「働く人の給料や、堤防づくりのすべてのお金を出すと、大金が必要だが、なんとしても、やりぬこう。」
と、かたく決心しました。



さっそく、工事が始まりました。
儀兵衛が調べたところ、広村は、ここ五百年の間に、ほぼ百年ごとに、大津波におそわれていることが、わかりました。
むかしの津波のようす、こんどの津波のようすをもとに、儀兵衛が堤防の設計をし、工事のさしずをしました。
村人たちは、よく働きました。
「村を守るために、がんばろう。」
「男も女も、働けば、すぐにお金がもらえる。」
「ありがたい、ありがたい。」
「田畑の仕事が、いそがしくなれば、工事のほうは、休みになるとか。」
「こんなに、働きがいのあることはない。」



四年の月日、多くの人々の力、それに大金をかけて、りっぱな堤防が完成しました。
（少しの間）
いなるの火が燃えた時の、安政南海地震津波から九十二年後、昭和南海地震の時には、予想したように、大きな津波がおそってきました。
しかし、堤防はゆるぐことなく、人々を津波から守りました。



和歌山県広川町の堤防では、毎年十一月に、津波まつりがおこなわれます。
「いなるの火をわすれません。」
「堤防づくり、ありがとうございます。」
「子どもたちがそれぞれに、ふくろずつの土を堤防に運び、積み上げていります。」
そして、
「みんなで、ふるさとを守ります。」
と、防災の心をあらたにしますのです。